



TITLE:

後漢中期の政治と社会：順帝の即位 をめぐって

AUTHOR(S):

狩野, 直禎

CITATION:

狩野, 直禎. 後漢中期の政治と社会：順帝の即位をめぐって. 東洋史研究
1964, 23(3): 304-323

ISSUE DATE:

1964-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152673>

RIGHT:

後漢中期の政治と社會

——順帝の即位をめぐる——

狩 野 直 禎

一

後漢王朝が成立して百年、建國以來の國是である經術主義も、後漢の社會に種種な形を取って、影響を及ぼして來るようになった。學問の隆盛とその功罪については、顧炎武をはじめとして、先學の言及されたものも多くあり、ここに贅言を費すにもおよばないが、一言にしてこれを蔽えば、名節を重んずる風がさかんとなり、禮教主義の政治體制が貫徹した。しかしその反面に、學問の中毒現象が生じた。それと一方では、偽善の出現をも見るにいたったということになる。

またこの時期を後漢政治史の上からみると、これも趙翼以來言われていることであるが、天子が少くして死んだた

め、幼年で帝位に陞ったり、或いは外藩より入って皇位を繼ぐものが多い。その結果皇太后が垂簾の政を執り、外戚が横暴をきわめるようになっていく。その上、宦官が政治に關係を持つようになり、後漢の政治は混亂に陥ち入ってくる。

こうした状態は、いわゆる名節派・禮教派から見ると、まさに憂うべきことで、事態を匡救しようとして、多くの議論が闘わされた。そして地方から儒教の學問と實踐を通じて進出して來て、後漢王朝の官僚となった豪族の代表達は、實際活動をも起すにいたった。この現象は、やがて後漢末の黨錮の獄にまで連るものであるが、それは兎も角として、後漢一代を通して、順帝から桓帝の治世にかけての時期ほど、政治をめぐるの活潑な議論が出された時はない。

かったであろう。これは政治の混亂という現象があったにせよ、後漢の學問隆盛の一つの現れであるとも見られよう。

私は嘗て「後漢時代地方豪族の政治生活―健爲張氏の場合―」（史泉第二二號）において、一地方豪族の父子二代の活動を通して、和帝・順帝の治世に彼らが中央政治とどのように關係していったかを考察した。この稿に於いては、宮廷内からその時代の政治・社會・學問の動きを見て行きたいと思う。

二

私はこの稿を「後漢王朝が成立して百年」という言葉で書き出したが、實は順帝が即位したのは、光武帝が後漢王朝を起して丁度百年目にあたる。ところが、この順帝の即位には、複雑な事情がからみ合っていた。

光武帝には郭・陰の二皇后があった。郭皇后は河北眞定の人であり、陰皇后は帝と同郷の河南南陽の出身である。帝は最初長子である彊（母は郭皇后）を皇太子としたが、郭后を廢した後は、陰氏の生んだ第四子にあたる莊を後嗣

と定めた。これが二代皇帝明帝である。明帝の後には長嗣子章帝が即位したが、章帝在位中にまたもや廢太子事件が起った。

章帝の皇后竇氏は、扶風の豪族で、後漢開國の功臣竇融の曾孫であつた。所が章帝と皇后の間には子供がなかつた。一方、帝は宋貴人・梁貴人との間にそれぞれ子供をもうけ、宋貴人の子慶を皇太子に定めた。竇皇后はこれを嫉妬し、かつは外戚としての自己の立場を固めるため、宋貴人を、ついで梁貴人を譖殺し、梁貴人の子肇を養子になし、皇太子慶を廢して清河王に封じ^③、あらたに肇を皇太子の位につけた。この時にあたつて、竇皇后の意を承けて暗躍し、宋貴人に毒藥を飲むにいたらしめたのが、紙の發明で有名な宦官蔡倫であつた。そしてこの清河王慶こそ、實は順帝の祖父にあたる。順帝はかく出生以前から數奇の運命を抱いていたのである。

さて章帝は慶を廢したとは言え、これを非常に憐み、また慶も孝恭で學問にも優れていたので、皇太子と同等の待遇に與つた^④。章帝の後四代皇帝に立ったのが和帝、即ち梁貴人の子肇である。和帝の皇后鄧氏は清河王慶の子（後の

閼皇后も亦嫉妬深く、李氏を鳩殺してしまった。この事件がいつごろ起ったのか詳にしないが、皇子保が生れて間もないことと思われる。彼は祖父の清河王慶と同じように、母を正皇后に奪われたわけである。母を失った保は鄧皇太后の手に養育されていたものようである。そして宦官曹騰がその學友となっていた。騰は宦官ではあるが、後漢書宦者傳によれば、身を持すること厭で、多くの著名人を世に出している。宦官という言葉から受ける感じの人物とは異っている。なおつけ加えるなら騰は三國魏の曹操の養祖父にあたる。

安帝には保の外に子がなかったので、永寧元年(一二〇)四月、六歳の保が皇太子に立った。保が生れて滿五年の間、朝廷には楊震・李郃・張皓・袁敞などといった人たちが、九卿に任命されて來ている。それともう一つ注目されるのは、鄧太后が皇室や貴族の一門の子弟のために學校を開いたことである。

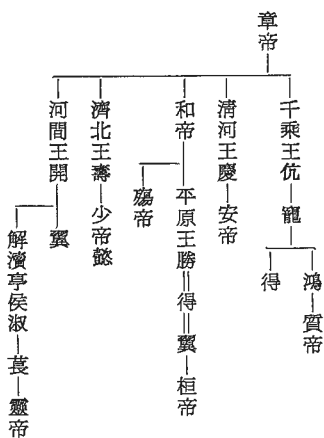
「元初六年(一一九)、(鄧)太后詔、徵和帝弟濟北河間王子男女年五歲以上四十餘人、又鄧氏近親子孫三十餘人、並爲開邸第、教學經書、躬自監試、尚幼者使置師保、朝

夕入宮、撫循詔導、恩愛甚渥、」(後漢書卷十上和熹鄧皇后紀)

勿論これには先例があった。明帝の皇后馬氏が永平九年(六六)に、外戚樊氏・郭氏・陰氏・馬氏の子弟のために五經博士を置いて、學問を習得させたことで、鄧太后もこれに倣ったわけである。皇后がこの時從兄の河南尹鄧豹・越騎校尉鄧康等に示した詔書には、時の風俗の淺薄にして、五經の衰歎せるを嘆じ、あわせて彼ら貴族の子弟が安易に流れ、家を破ることを恐れて、學校を設けたと述べている。なお學校がこの年に開かれたのは、保が五歲になりながら、皇太子に立っていないことと關係がある(補)。

この詔書中に見える濟北・河間の二王とは、いずれも章帝と申貴人の間に生れた子である。そしてこの時招集された濟北王の子の中には、のちに述べるごとく、保が皇太子を廢されてしまい、皇太子がないままに安帝が死んだとき帝位を繼ぐことになった少帝懿がいたであろう。少帝懿の年齢は不明であるが、少帝という諡から考えて、彼が保(順帝)と同年輩の少年であることが豫想されるからである。また河間王の子の中には平原王——先に述べた先天的

廢疾者の後を嗣がせられた翼もいた。翼はとくに鄧后の寵を得たといわれる。そして彼の子は後に位に即いて桓帝という。さらには翼の弟で靈帝の祖父にあたる淑もこの中にいたことであろう。



こうして見てくると、五歳の幼児保自身には、そのような意識はなかったであろうが、かれのライバルともいうべき人びとが、多く京師に上って来たことになる。そして、かれら自身以上に、これら皇子・王子を取り囲む者たちの中に、多くの暗闘が行われたことであろう。以上が順帝生後、立太子までの主な事件である。因に言えば、保が太子に立つより一ヶ月前に濟北王壽が死に、保の立太子後四日目に、翼が平原王に封じられた。

四

保が皇太子となった翌年、即ち彼が七歳の時鄧太后が死んだ。

最初、鄧太后は周章ら群臣の反對があったにもかかわらず、平原王を先天的廢疾者として和帝の後を嗣がしめず、安帝を立てて己の意のままにこれを動かそうとしたのであるが、帝は生長すると必ずしも後の意志通りには動かなくなつた。

「帝少號聰明、故鄧太后立之、及長、多不德、稍不可太后意、」

「多不德」の三字は文字通り、人倫の徳を破る行爲とのみ解すべきではないであろう。十三歳で即位した帝も、順帝が生まれた時には二十二歳になっている。青年安帝に鄧太后の意に叛く行動があったとしても當然であらうし、そうした事柄を含めて「多不德」の表現がとられたのであろう。

ところで鄧太后は安帝が成人となっても、一向に帝に親政を行なわせる様子がない。そればかりか、彼女は安帝には従兄弟に當る濟北王・河間王の子を京師に徴しており、

とくに河間王の子翼は彼女の寵を得て平原王の後を嗣いでいる。鄧太后は、かつては平原王勝と彼を推す一派を抑えて殤帝を、さらに安帝を位に即け、今度は逆に平原王勝とは直接血縁こそないけれど、その祭祀を奉ずる翼を寵愛しているのである。保は皇太子の位にあるとはいっても、その位置は極めて不安定であった。鄧氏がその政權を維持するため、廢立を行うかも知れないという豫測を行うものが現れ、又鄧太后が潛かに廢帝の故事を調べさせ、平原王翼を立てようとしているとの噂が聞えて來た。

こうした一連の動きに對して、鄧氏の中にも反省の聲を擧げるものが見出される。越騎校尉鄧康がその人である。彼はしばしば太后に上書して公室を尊び私權を損ぜんことを述べている。しかしその意見は聞かれず、却つて康は屬籍を絶たれるにいたつた。もっともそのために、康は鄧氏族誅の際にはその禍をまぬかれ、順帝の世に太僕となり世間から重んぜられた。

さてこの様に、鄧氏一門の中からも反省の聲が出る程であつたが、とくに廢立の噂は帝をめぐる人びと、皇后閻氏や帝の乳母王聖及びこれに連る宦官中黃門李閏・江京らを

刺戟しこれを恐れさせた。彼らは事ごとに太后を帝に譖していたが、太后が崩ずると直ちに鄧氏覆滅の計畫が廻らされ、結局鄧氏は族誅され、平原王翼も貶せられて都郷侯となり、歸國して閉門自守してわずかに死を免るを得た。この鄧氏誅滅事件に對しての朝廷内外の動きについては、前掲拙稿で述べたので、ここには觸れない。

五

安帝親政によつて皇后閻氏をはじめ、王聖・李閏・江京らが勢力を得たのは當然であらう。彼等は内外を煽動して、あらそつて侈虐をなし、

「(王聖女) 伯榮出入宮掖、傳通姦路、」(後漢書卷五十 四楊震傳)

と記される如く、横暴な振舞いが多かつた。これに對して諫を行つた楊震が終に死に至らしめられたことは有名な事實である。また安帝の實母耿貴人の一門も榮達した。

しかしその一面安帝は親政の初に當つて賢士を召し出し、人心の一新を行つた。この時登用された人に馮良・杜根らがある。かれらの中には外戚鄧氏に反對して野に退き、

不遇であつた人がいる。後漢書卷四十六陳忠傳をみると、
「安帝始親朝事、（陳）忠以爲臨政之初、宜徵聘賢才、
以宣助風化、數上薦隱逸及直道之士馮良・周燮・杜根・
成翊世之徒、」

とある。彼らは反鄧氏^①反外戚の意味でやはり禮教派と見るべきであらう。

陳忠は沛國の人。司空陳寵の子で、陳氏は法律に詳しい家柄である。忠は永初中（一〇七〜一三）に司徒府に辟され、三遷して廷尉正となった。ついで司徒劉愷^②に法律に明なることを認められて尚書に擢拜され、斷獄を主知する三公曹尚書に居らしめられた。元初二年（一一五）〜永寧元年（一二〇）の間のことである。

この陳忠が安帝に推薦した人びとの中、杜根・成翊世らは鄧氏にうとんぜられていた。杜根は河南潁川の人で、永初元年に孝廉に擧げられて郎中となったが、彼は同時郎と共に上書して、鄧太后は安帝に政を歸すべきであると諫め、捕えられて殺される所、詐り死して三日目に逃れ歸つたという。成翊世も平原の郡吏の身で鄧后に政を歸すことを諫めて罪せられていた。

このように安帝親政の際、その周圍には閻氏・王聖等外戚・宦官と陳忠らに代表される正論派とが存したわけだが、前者の横暴は甚しく、陳忠は摯紳先生論を造ってこれを諫めたという。

六

かくの如く勢威をほしいままにする閻氏一派にとって、鄧氏なく、平原王失脚後、目の上のこぶとなるのは、皇后の所生でなく、その生母を自らの手で殺した皇太子保であらう。太子を廢さんとする動きは着着と進められつつあった。かくて延光三年（一二四）を迎えた。順帝十歳の時である。まず三月に、朝廷にあった骨鯁の臣太尉楊震が職を免ぜられ自殺した。その裏には耿氏・宦官樊豐らの策謀があった。そしてその九月、皇太子保が廢されて濟陰王におとされた。後漢書安帝紀には、

「九月丁酉、廢皇太子保、爲濟陰王、」

の十三字を記すだけである。しかし、その背後には安帝側近派の政權確保の動きがあり、直接の動機としては、安帝の乳母と皇太子の乳母及びかれらを取り巻く宦官との衝突

が擧げられる。その経緯は次の如くである。

「延光三年皇太子が驚病にかかって阿母王聖の第に行ったことがあった。この時、王聖は野王君に封じられ、得意絶頂の時であって、第宅も新に作られたところであった。その邸に皇太子保が行啓したのである。この時太子の乳母王男・厨監邴吉らが、この邸宅は土禁^⑥を犯しているから、皇太子はここに永くおるべきでないと思い、この二人と王聖らとの間に争論が行なわれ、ついに王聖側は王男らを幽死させるにいたった。」

このことは後漢書卷十五來歷傳、及び太平御覽卷九十二引續漢書に見える。

これが前に言った如く延光三年（順帝十歲）のことであった。先には生後間もなく實母に別れ、今また乳母を殺された少年保が、吉・男のことを思い歎息を發したのも無理からぬことである。しかし王聖一派はその歎息にすら後禍を感じ、皇太子を廢さんとして、中傷を行った。

ここに皇太子を廢すべきか否かについての會議が宮中に招集され、九卿以上の者が出席した。^⑦廢太子派の主要な地位を占める耿氏出身の大將軍耿實は、帝の旨を承けて太子

廢すべきの意見を述べた。王聖らの讒言を信じたわけで、その内容は今知ることはできない。一體耿實の妹は安帝の父清河王慶の王妃であった。故に安帝に取っては伯父に當るわけで、順帝とも關係は深い。ただし安帝の實母は前にも述べた如く、犍爲（四川省）の人左姬であり、このように天子と皇太后、或は王子と王太妃が血縁で結ばれていない所にも、宮廷の人事關係の複雑さがある。

さて耿實の説に對して、太僕來歷・太常桓焉・廷尉張皓らが反對の意見を述べ、光祿勳殷諷・宗正劉璋・將作大匠薛皓らもこれに與した。

來歷は南陽新野の人。後漢建國の功臣で、光武とも姻戚關係のあった來歙の曾孫である。

桓焉は歐陽尚書家桓榮の孫で（註⑧参照）、太子少傳に任ぜられていたことがあった。

張皓については前掲拙稿で述べた。

來歷などの意見は、

「經說、年未滿十五、過惡不在其身、且男吉之謀、皇太子容有不知、宜選忠良保傳、輔以禮儀、廢置事重、此誠聖恩所宜宿留、」（後漢書卷十五來歷傳）

というのである。ここに經に説くならくというのは、公羊傳によつたものと考えることができる。しかし王先謙は、

「昭二十三年公羊傳、尹氏立王子朝、何休注、尹氏貶、王子朝不貶者、年末滿十歲、未知欲富貴、不當座、明罪在尹氏、……蓋漢時治經者、舊有此說、故來歷等據之、以爭濟陰王、何休據之、以詰王子朝耳、」(後漢書集解)と述べている。王先謙によれば、この語は當時の經學者の間で使われていたもので、それが公羊に取り入られたのは何休以後で、この場合必ずしも公羊傳によつたとする必要はないというのである。

さてこのように議論が分れたが、來歷などの意見は用いられず、皇太子は廢されて濟陰王におとされ、東宮に仕えていた人びとは朔方等の邊境に徙された。

七

その後もこれら正論派の人達は、皇太子の廢すべからざることを訴えた。張皓は言う。

「昔賊臣江充造構讒逆、至令戾園興兵、終及禍難、後靈關三老一言、上乃覺悟、雖追前失、悔之何逮、今皇太子

春秋方始十歲、未見保傳九德之義、宜簡賢輔、就成聖質、」(後漢書卷五十六張皓傳)

即ち前漢武帝が戾太子を廢し、後にそれを悔い、讒言したものを罪した故事を引いて論じたのである。文中戾園とは廢太子戾を指す。皓は續いて皇太子の年の幼いこと、賢人を選んで輔導し、その好き性質を伸ばすべきであると説いている。來歷と張皓に共通したものとしては、

「皇太子はまだ幼いのであるから、たとえ悪いことをしても、それは周圍のものの責任である。王吉等内官の輔導は適當でなかった。この際禮教的教養を有する人びとによつて、輔導はなされるべきである。」

という事が指摘されるであらう。

さて張皓のこの奏も省りみられなかった。ここにおいて反對運動も亦一段と激化した。來歷は光祿勳祿諷・宗正劉瑋・將作大匠薛皓・侍中間丘弘・陳光・趙代・施延・太中大夫朱伉・第五頡・中散大夫曹成・諫議大夫李尤・符節令張敬・持書侍御史龔調・羽林右監孔顯・城門司馬徐崇・衛尉守正樂闡・長樂未央殿令鄭安世ら十餘人と要結して鴻都門にいたり、太子の過なきを證した。又龔調は法律の上か

ら、たとえ男・吉が罪を犯したとしても、皇太子はこれに連座すべきでないという議論を行った。

ここに列挙した人物について、それがいかなる經歷を有するか解らないものも多く、又それを強いて明にする必要もないが、二・三の人について、これを紹介しておこう。

殷諷はかつて楊倫（註⑧参照）・張皓らと鄧隲の府に辟されていた。この人の名は華陽國志にも見え（卷三廣漢郡條）、惠棟は後漢書補注において「諷は蜀の廣漢の人なり」というが、それは誤りで、華陽國志の文章では、廣漢太守に任じられていたことになっている。

施延は沛國の人。安帝親政後、有道孝弟の士を以て侍中となっていた。

朱伥は註⑧にも見るごとく、丁鴻の門生で陳寵の故吏でもあり「能說經書而用心褊狹、」と評された。

李尤は文苑傳にその名が見える。廣漢雒（四川）の人。

賈逵から司馬相如・楊雄の風ありと言われ、劉珍らと「漢記」を編纂した。

龔調も華陽國志にその名が見える（卷十二）。巴郡安漢の人である。

第五誼は後漢初期に名地方官として名をはせた第五倫の子であり、曹成は有名な女流學者班昭の子で、女誡中に昭が「恒恐子穀（成の字）負辱清朝、」といっているのはこの成のことである。母が鄧太后と關係が深かったため關内侯に封じられ、中散大夫に任じられていた。そして鄭安世は鄭興の孫、鄭衆（司農）の子、「傳家業」とあるから左氏春秋家である。

來歴らの要請に對して、安帝及びその左右の者も、一時はどのように對處するか窮地におち入った。しかし、やがて次の詔書が出された。

「父子一體、天性自然、以義割恩、爲天下也、歷（來歷）諷（殷諷）等不識大典、而與羣小共爲譴譴、外見忠直、而內希後福、飾邪違義、豈事君之禮、朝廷廣開言事之路、故且一切假貸、若懷迷不反、當顯明刑書、」（後漢書卷十五來歷傳）

というのである。即ち冒頭、「父子一體、天性自然、」と孝經の句を引いて、父としての安帝が子である皇太子に天性自然の愛情を抱かないことはないと言ふ、しかも「以義割恩爲天下、」と所謂の大義滅親の理から、皇太子を廢さねば

ならなかった苦衷を述べる。そして一轉して、歴などの態度を非難して「外見忠直而内希後福、」といい、彼らが皇太子の廢位に反對することは忠義心の表明であるようだが、實は皇太子が將來天子の位に即いた場合、それによつて利益を得んと希っているのであるといふのである。これは言葉の綾ともいえるであろうが、一面、廢太子事件をめぐる黨派の争の醜さを示すものともいえよう。そして最後に「且一切假貸、若懷迷不反、當顯明刑書、」とはなはだ強壓的な態度で、この詔を結んでいる。

この詔書が出ると、廢太子反對派にも動搖が生じた。まず將作大匠薛皓が頓首して「宜如明詔、」と朝廷側に折れた。來歴はこの態度に怒り、

「屬通諫何言、而今復背之、大臣乘朝車、處國事、固復輒轉若此乎、」（後漢書卷十五來歷傳）

とその弱腰な態度に叱責の語を發するが、大勢を支うべくもなく、最後には歴だけが取り殘されてしまう。そして結局歴及びその兄弟は官を免ぜられ、國相を削られてしまつた、

斯くてこの事件は落着して、皇太子は濟陰王におとされ、

宮中の德陽殿西鍾下に住む身となった。

八

廢太子事件があつて半年、延光四年（一二五）三月に安帝は歿した。年三十二。時に帝は南巡して南陽地方にいた。帝が崩ずると閻氏は江京・樊豐らと圖り、帝の喪を發する時期を相談した。それは前年皇太子を廢したのち、北郷侯懿を皇太子に立てる意向であつたが、未だ正式には決定していなかったからである。遽に喪を發すると、濟陰王保が擁立される恐れが多分に存する。假にそういう事態がおれば、今までの苦心は水泡に歸する。そこで彼らは、こういう場合しばしば用いられる手段であるが、帝疾甚しと稱して、恰も生けるがごとくに帝の死體を扱い、洛陽に還つて直に喪を發した。勿論廢太子の身である濟陰王は、父帝の死に當つても、殿に上り梓宮に親しく臨むこともできない。悲號食せず、内外の羣僚はこれをかなしめないものはなかった。

一方閻氏は「久專國政、貪立幼年、」と欲して、豫定通り濟北王壽の子、北郷侯懿を帝位につけた。少帝である。

安帝の死によつて、後漢王室内における立場が後退した王聖一派と、大將軍耿寶とが相阿黨するに座して、少帝即位後二十日餘りで宮中から一掃された。安帝の皇后閼氏一派のみが宮中に残り、大きな勢力となろうとした。その矢先、延光四年十月に少帝は病氣になった。

所で閼氏を取巻く人士の中には、少帝擁立に反對している人がある。それは崔瑗である。瑗は琢郡(河北)の人で、崔駰の中子、崔寔の父に當る。父の業を傳え、十八歳のとき侍中賈逵に師事して、天官歷數・京房易傳・六日七分(天文曆算の術)に明らかだった。また馬融・張衡とよかった。年四十で始めて郡に仕え、度遼將軍鄧遵に辟された。遵の故吏になったわけであるが、鄧氏誅滅後免ぜられて國に歸り、ふたたび閼顯の府に辟された。顯の府には彼と同じように鄧遵の府に辟され、鄧氏滅亡後顯の府に辟されて長史になっていた巴郡安漢(四川省)の人陳禪がいた。瑗や禪が顯の府に辟されたころ、廢太子事件につづいて少帝擁立という事態が生じた。瑗は少帝が正位にあらずして後嗣に立ったのを見て、事が必ず破れるであろうと考へ、一步進んで少帝の廢立を行なわせようとした。しかし

顯は毎日沈醉の生活に浸っていて、これを言う機會がないままに、或日禪に向つて、次の如く言つた。後漢書卷五十二崔瑗傳に見える。

「中常侍江京・陳達等、以嬖寵惑亂先帝、遂使廢黜正統、扶立疎孽、」

と、先ず江京・陳達らが、皇太子を廢して北郷侯を立てた事實を言う。そして瑗はここに前漢呂后が少帝を立てた事を想起する。

「少帝即位、發病廟中、周勃之徵、於斯復見、」

少帝が即位後間もなく發病したことは先に述べた。周勃とは事新しく述べる迄もなく、前漢呂氏の亂に、呂氏一門を討伐し文帝を擁立した大功のある人で、後の二句で少帝の滅ぶことを豫見する。では閼氏が呂氏の二の舞を避けるにはどうするか。

「今欲與長史君共、求見說將軍、白太后、收京等、廢少帝、引立濟陰王、必上當天心、下合人望、伊霍之功、不下席而立、則將軍兄弟、傳祚於無窮、若拒違天意、久曠神器、則將以無罪、并辜元惡、此所謂禍福之會、分功之時、」

というのである。即ち閼后並に顯に説いて、少帝を廢し、廢太子濟陰王と結んで、それによって天心・人望に合し、閼氏一族の長久を計ろうとするのであった。なおこの計畫は禪が猶豫し決せざる間に、少帝が薨じ、後述の如く、孫程らのクーデターが成功して挫折し、閼氏は失脚してしまつた。

九

話は少し前後するが、少帝の發病は濟陰王を取り巻く側近の人びとにとっては見逃せない機會である。ここに側近派というのは、安帝の場合と同じく、外戚・宦官で構成されるべきものであらうが、濟陰王の場合、外戚にあたる家はないので、宦官が主勢力を占めている。

ここに宦官に孫程というものがあつた。彼は安帝の時中黃門となつて、長樂宮に給事し、王聖らとともに鄧氏を失脚させ、楊震を自殺に迫りやることに力を示し、さらに皇太子保の廢太子にも一役買つていたと想像されるが、少帝即位後の肅政には、どのような工作を行なつたのか免れてゐた。その孫程が、少帝の病を聞くと、かつては自身も

その廢位には一役果たした濟陰王に逆に接近して、これと結ぼうとして活動を開始した。程は先ず濟陰王謁者長興渠を訪れてこれに説いた。

「王以嫡統、本無失德、先帝用讒、遂至廢黜、若北鄉侯不起、相與共斷江京閼顯事、乃可成、」(後漢書卷七十八 孫程傳)

と。渠はこれに賛成した。又、中黃門で以前に太子府史をしてゐた王康、長樂太官丞の王國らも之に加わつた。一方程らのこうした動きを見た江京も閼顯に向つて、

「北鄉侯病不解、國嗣宜時有定、前不用濟陰王、今若立之後、心當怨、又何不早徵諸王子、簡所置乎、」(後漢書卷十下閼皇后紀)

と、すみやかに、少帝の後繼者を選ぶことをすすめ、顯もこれに同意したが、實行する暇もない中に少帝は死亡した。

江京と閼顯らは直に諸國の王子を徴して、その中から後繼者を選ぶうとした。この時その意中には、濟北・阿閭王の子があつたといわれるのは(後漢紀)、少帝の場合などから考えて、當然の結果であらう。しかし、それに先んじ

て孫程ら十九人のクーデターが成功し、順帝が即位するに
いたった。帝十一歳の事である。

なお程らの動きとは別に、禮教派の中にも李郃を中心
に、順帝擁立の運動が進められていたのであるが、程に先
んじられて、陽の目をみなかった。

十

順帝即位と同時に、論功行賞が行われた。孫程ら十九人
が封侯を得たことは、宦官封侯の始として有名である。つ
いで帝がかつて皇太子を廢された時、帝のために猛烈な反
對運動をおこしていた人が好遇を得た。桓焉は太傅とな
り、來歴は衛尉より更に車騎將軍に、朱伥は司徒に任じら
れた。また殺諷・閭丘弘・劉璋・鄧安世らはすでに死んで
いたので、代つてその子が郎となった。施延・陳元・趙代
等は公卿になった。また楊氏に對しては、震の忠を嘉して
改めて葬禮を行なうことが許され、鄧氏に對しても、順帝
は鄧太后の養育の恩に感じて登用を行った。そして楊震ら
とともに鄧騭の府に辟され、鄧氏失脚の際にはそれを痛み
追訟を行つて官を退いていた朱寵が太尉となつて尚書事を

録した。いわば政治の中樞に立つことになった。寵は學問
的には、桓郁の門人であつたから、歐陽尚書家と考えられ
る。

次に孫程らとは別に順帝擁立に努めた一派の人について
述べよう。この運動の指導的地位を占めていたのは司徒の
李郃、少府の陶範、歩兵校尉趙直らである。直は南陽の
人。來歴らと廢太子を行うことに反對していた趙代の子
で、後漢開國期の功臣趙惠の孫にあたる。また李郃は漢中
南鄭の人。父の諱は博士官に陞っている。郃は五經に通
じ、河洛風星の術にも長じていた。安帝の時三公に任じら
れ、郃の子固は順帝時代禮教派の代表として活躍した。

さて順帝はその後十九年の間天子の位にあり、その初期
においては人材を登用して政治にあたさせた。もともと彼
は伶俐な頭腦を持った少年であつた。しかしこうした資質
の持主であつたという、個人的な理由のほかに、次の如き
原因が考えられる。それは順帝即位の時に、宦官の力が大
いに興つていたといえ、それと同時に禮教派と目される
人びとが、宮廷内に重要な地位を占めていたという事であ
る。彼ら禮教派は儒教的教養を身につけている。そしてそ

の出身は決して或る一つの地方に限られたものではない。地域により中央に送りこまれた者に量的な差はあつても、^⑤

原則的には中國全地方からの出身者で占められる筈である。しかも彼らはそれぞれの地方においては輿論の指導者でもある。こうした廣いささえを持った人びとが宮中に多く進出してきて、帝の輔導をなしたのである。それともう一つは、順帝の初期には外戚が存在していなかったことである。外戚そのものは、特に後漢においては、儒教的教養という點からみれば、禮教派とよばれるものにくらべて、そう遜色のあるものとは考えられない。しかし政治の權力にもっとも近い所にあるという點で、政治に容喙しこれを混亂に導く大きな動因ともなり得る。外戚と宦官は目前の利害において相對立することもあるが、禮教的世界に立てば、結局は政治を亂すものとのレッテルをはることができ。順帝の初期にあつては外戚が存在せず、宦官も擁立の功がありながら、禮教派に押されがちの面があつた。そこには廢太子事件反對のさいに見られたとおり、宦官が悪いので、太子自身には罪がない。よき輔導者を選ぶべきであるという主張がなお一貫して存在している。その一つの現

れとして、司隸校尉虞詡と宦官の對立、或は將作大匠翟輔の活動が擧げられる。

十一

虞詡は陳國（河南省）の人。獄吏の家に育ち、尚書に通じて太尉李脩の府に辟された。その後鄧太后に認められ武都太守に任じられたが、法に座して免ぜられた。しかし楊震が自殺したころには侍御史であつたらしく、來歴は侍御史虞詡に向つて、

「耿寶託元舅之親、榮寵過厚、不念報國恩、而傾側姦臣、誣奏楊公、傷害忠良、其天禍亦將至矣、」

と語つた事が來歴傳に見える。彼のおおよその傾向を知ることができる。それ故に、順帝即位後直ちに司隸校尉に拔擢された。彼は司隸校尉に任ぜられるや數月の間に大傳馮石・太尉劉憲・中常侍程璜・陳東・猛生・李閔らを彈劾し、三公から、

「詡盛夏多拘繫無辜、爲吏人患、」（後漢書卷五十八虞詡傳）と上奏された。さらに彼は中常侍張防が權勢を用いてつねに請託受取すと廷尉に訴え、このまま放置すれば安

帝が樊豐らを重用して社僂を滅す一步手前にまで到ったこととの二の舞になることを憂うと言ひ、終に防とその一派とを朝廷から追放した。この間の兩派の争ひの經過は後漢書の傳に詳しい。

次に翟酺であるが、彼は廣漢雒（四川省）の人である。

華陽國志にも雒の氏族として翟氏は鐔・李・郭の三氏と並んで擧げられている。^⑥後漢書翟酺傳によると、彼の家は四世詩を傳え、彼自身は老子を好み尤も圖緯を善くするとあり、華陽國志には同郡の段翳に圖緯の術を學び、天官に明なるを以て侍中尚書になったと見える。安帝親政後も耿寶及び閭顯が權勢を恣にしていることを諫めているが、その上疏中には老子が引かれ、緯書が援用されて彼の學問の傾向を示している。順帝即位と共に光祿大夫に拜され將作大匠に遷った。彼は財政整理に敏腕を振ったようである。

「損省經用歲息四五千萬、屢因災異多所匡正、」（後漢書卷五十八翟酺傳）

と記されている。このため權貴に忌まれ誣告されて官を退いた。その後郷里にあって教育に従事していたが、張楷^⑦と共に反を謀ったと追訟された。勿論これは事實無根として

釋された。

順帝のころより地方名望家が政界に進出し、權臣側からは虛名を偷んで實際に益なしという非難宣傳が起っているが、^⑧龐參傳にも見えるように、

「是時、三公之中、參名忠直、數爲左右所陷毀、」

と兩派の對立は甚しいものがあつた。しかしそれだけ禮教派の進出が目ざましく、權臣側を不安におとし入れたわけでも、范曄の言の如く禮教派の中には野にあっては名聲を有しても、それが實力の伴はない虛名であつて、實際政治の衝にあたつては無力というか、或はかえつて有害なもの（例えば樊英の如き）もあつたろうが（方術傳論）、これを以て全體に及ぼす事は早計の譏をまぬがれないであろう。

さて順帝初期の政治傾向を示すもう一つの事件として孫程排擊事件があつた。程は順帝を帝位につけるにあたつては、功績の大きかつたものであるが、その驕恣が甚しく、干亂悖逆と劾奏され、官を免ぜられて遠縣に徙封されようとした。擁立の功ある孫程ですら驕恣なれば追放をまぬがれなかつた。流石にそれに對しては、周舉・朱伥らの擁立の功を忘るべきでないという議論がおこつて、程は許され

た。

さてこの順帝の治世も、陽嘉元年（一三二）皇后に梁氏を立てたところから崩れて来る。本紀を見ればこの年より急に地方に妖亂が頻發し、災異が現れて来ることに氣づく。妖亂や災異は順帝後半の治世の變調の兆しを象徴するように思われる。しかし順帝の時代には、最初にも述べたように、所謂禮敎派の人びとの議論はなおさかに行なわれ、中央にあつてもなお漢安元年（一四二）の八使巡行の擧の如きものもあつたわけである。

十二

三代清白——祖父・父の三代に渡つて賤業に従事していいないことは、科擧受験の際の缺くべからざる資格であつた。その裏には三世代を経ないと、本當に士大夫としての敎養が身についたものとはならないという考え方が存ずとされている。

しかし、これは單に個人の敎養という事だけでなく、社會現象にも應用しうることではないかと思う。一王朝の興廢をこのような觀點から考察することは勿論亂暴な議論

で、かるがるしく口に出すべきことではないのであるが、私にとつては甚だ魅力のあることである。後漢王朝は三世代に約百年を経たころ、國初以來の經術主義はようやく、廣く浸透し、當時の政治的混亂を匡救するべく、これら經術主義を身におびた人人が朝廷要路に進出して來た。本稿は順帝の即位に到るまでの經緯を追ひながら、所謂禮敎派と、宦官・外戚派との對立と、人間關係を主として考察したものである。

一體、後漢王朝は秦漢時代の最後の時期として、古代帝國的資格を持つてゐると、一應考えられるべきであらう。

その中央・地方を通じての政治組織——三公・九卿・郡國制、或は租稅制度・土地制度（それらは充分に明らかにされてゐるとはいえないが）、何れも統一國家の維持・強化を目的として作られていた。それは秦始皇・漢武帝によつて完成されたものであり、これを繼承するものであつた。

しかし、ひるがえつて後漢の政治の實情をみていくと、事態は必ずしも制度が規定した方向に進んでゐるとはいえない。或は、前漢武帝の時頂點に達した瞬間に、中國の古代帝國は崩れはじめたといつてもよからう。武帝以後の前

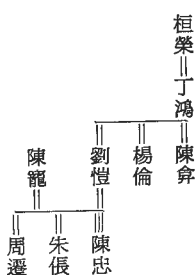
漢王朝のなった問題は、地方における「郷曲に武斷する輩」の処置である。諸侯王の政治力・經濟力・軍事力を抑え、統一國家を名實ともに完成した武帝の時、早くも限田策が董仲舒によって出されていることは象徴的で、それ以後の漢王朝の大きな問題となっていく。ただ前漢時代には、これら豪族の勢力は、しだいに自由農民を傘下におさめて、自由農民に財政の基礎をおく國家經濟に影響を與えるようにはなるが、まだ豪族勢力は、統一王朝を分裂さす方向にだけ動くものでなかった。

さて、後漢王朝の建設が、理想主義的な復古思潮による王莽の政治に反撥した、「劉氏復興」の世論に乗り、しかも結局は豪族連合の形をとってしか果されなかった所に、後漢時代の抱く矛盾が内在していた。豪族——郷曲に武斷するもの、それは究極には統一政治を亂すものである。その豪族との連合による王朝の復興は、劉氏が統一帝國の君主として、將來統一政治を推し進めて行こうとすればする程矛盾を明にし、兩者の間に衝突の起ることをまぬがれなくする。豪族の中で外戚は逸早く後漢政權と連合し、貴族化していった。しかしその他の地方豪族は、後漢時代にあっ

てはまだ自力で獨立するほどの力は持っていなかった。その結果後漢の王朝に依存しつつ、その勢力を伸張していかねばならない。と同時にそれは諸豪族間の競争を意味する。そのために取られる手段は、後漢朝廷に官吏として入りこんで、政治的勢力を身につけることである。それは後漢王朝の側からいえば、國家體制を維持するための手段でもあった。豪族はその勢力を養うために後漢王朝に入り込むのであるから、國家が存続していくことを必要とする。ここに豪族は、儒教的教養と政治的必要から、王室を尊ぶことを表明しつつ行動する。

ところで豪族が朝廷に進出してくると、ここに天子の側近に集くう宦官勢力と對立する。宦官は單に天子の側近にあって、政治に容喙するというだけでない。彼らは恥ずべき刑に處せられたものであり、自ら志願したものは、儒家の倫理、しかも最も根本にある孝道にそむく行爲をなした者である。儒家道德の實踐者をもって任ずる豪族の代表者たちが、これを二重の意味で憎惡するのも當然であろう。こうして外戚を含めての豪族間の争い、豪族間の對立は次第に激化する。特に二世紀になって、天子の夭逝というや

拙稿に觸れた。さすれば愷は陳弇・楊倫と共に丁鴻の同門である。桓榮は歐陽尚書（今文）の家であり、その學は丁鴻・陳弇と授受されるが倫は古文尚書を鴻から習ったとその傳に見える。今文學者にして古文學を傍修するものも後漢には多かつたのである。ただし愷が鴻から古今何れの學を學んだかは不明である。



- ⑨ 土禁とは、王充が論衡調時篇に、
「世俗起土興功、歲月有所食、所食之地必有死者……」
と言っている。

- ⑩ こうした場合の會議の構成については久村因「漢代の遷蜀刑」

- （東洋學報第三十七卷第二號）

- ⑪ 公羊學が竹帛に載せられるにいたった時、從來學者が傳えていた格言などを多く取り入れた。狩野直喜「兩漢學術考」

（筑摩書房一九六四）

- ⑫ 安帝の初期には三年の喪を行うべきか否かについての議論があった。こうした種類の議論は大體において、正論派の負けとなつたようである。前述の三年の喪についても「宦官之を便とせず」というのが結論になつている。

- ⑬ 拙稿「華陽國志の成立をめぐる」（聖心女子大學論叢二十）

- ⑭ 後漢の中期、雒出身の活躍が目立っている。酺と直接の関係はないが、張皓らのグループが雒の出身であることは拙稿に述べた。

- ⑮ 張楷は註⑭に觸れた雒グループの中心張翊の子で、順帝の始に禮教派が多く召し出された時、その選衡の仕に當つた人である。

- ⑯ 岡崎文夫「魏晉南北朝通史」（四頁）

本稿はかつて京都大學東洋史大學院會（舊制）の解散に當つて起稿したものに加筆補訂を行つた。大學院在學中御指導にあずかつた宮崎・田村・佐伯・羽田の各教授、佐藤助教授及び大學院會に出席されていた同學諸先輩に厚く感謝する。それとともに本稿加筆中丸善石油株式會社より宇都宮清吉教授を代表とする「中國中世貴族社會の體系的的研究と資料蒐集」に對して科學獎勵金が授與された。その報告の一部をも兼ねることを許された。

（補）後漢歷代の皇帝が、何歳で皇太子になつたであらうか。明帝は東海王彊が廢されたあと、皇太子になつたので時に十六歳であつたが、彊は一歳で皇太子に立つていた。章帝は四歳、廢太子慶は二歳、慶が廢された後皇太子に立つた和帝は四歳である。廢帝、安帝、少帝は皇太子に立たずに即位した。その理由は文中に明である。こうして見てくると保が五歳になり、しかも時の皇帝安帝の唯一の子でありながら皇太子に立てられなかつたことは、後漢王朝としては異例に屬することと思われる。